

卒業生からの人文学部を目指す 皆さんへのメッセージ

ここに掲げた文章は、大学4年生の時に自らの就職活動を後輩たちに語ったものです。人文学部ホームページに掲載されたものを、再掲したのですが、その際書いた本人に了承を得るために連絡を取りました。その際に近況を書いてくれた卒業生もいました。それで、ここに掲げた文章は、卒業時に書かれた者そのまま、近況をプラスする形で書き加えられたもの、大学時代を振り返る形ですべて書き直したものの3つの形があります。それを出来るだけ分かるようにしてあります。

言語文化学科言語情報学コース(2015年3月卒業)

江頭侑子

(新たに書いて頂きました。)

なんとなく「英語でしようかな」と思って大学に入学しました。文学も気になるけど、英語って将来役に立ちそう、などと当時は思っていたのです。しかし、大学が実際始まってみると中国語に熱中しました。私の知っている「外国語」は英語だけだったのだと思い知りました。まったく知らない世界が広がっていたのです。わくわくしながら勉強するうちに言語学そのものに興味湧いてきて、「どんな言語でも挑戦できる」という言語情報学コースを選択しました。

私は言語と並行して司書の勉強をして、図書館に興味を持ちました。意外ですが、国立大学で司書資格が取れる大学は実は少ないのです。結果として図書館関連会社に就職しました。

今の仕事では、司書の勉強はもちろん役に立っています。しかし言語学の知識も役に立っています。なんと、台湾国語とヘブライ語を扱う機会がありました。大学の頃「なんとなく楽しそう」と思って手を出した言語が、意外なところで役に立って、自分でも驚いています。

「この学問は将来性がないから」と、自分の将来にピンポイントで役に立つような選択をするのも一つの手だとは思いますが、将来何が役に立つのかなんて本当は誰にもわかりません。一年生の頃、「それなら、せっかくだし好きなことをしたい」と思いました。

高校までは「やらねばならない勉強」が決まっていました。しかし、大学では「興味があること」「好きなこと」を勉強して良いのです。そこに「この勉強は社会の役に立つか」は関係ありません。「これって面白



い」と自分が思うことをやらせてもらえる。それが人文学部だと私は思います。自分の興味に熱中している人は、とても魅力的に見えます。言語も哲学も文学も社会学も歴史も、きらきらしている学生と先生が沢山いました。そんな中で好きなことを勉強できたから、今の自分があるのだと思っています。楽しすぎてあっという間に過ぎた4年間でした。

言語文化学科言語情報学コース(2015年3月卒業)

黒田莉々

(新たに書いて頂きました。)

私は日本語について深く学びたいという思いで、人文学部言語文化学科へ入学しました。山口大学人文学部では、学科やコースの枠にとられず、自分の興味に合わせて授業を受けることができます。講義を受けるうちに、日本語だけではなく人間のことばそのものについてもっと知りたいと思うようになり、言語情報学コースを選択しました。

聞いたこともないような言語の発音を皆で練習したり、音声・文法・意味などさまざまな視点から言語データを分析したりするのは、とても興味深く、やりがいのあることでした。先生方や仲間にも恵まれ、充実した学生生活を送ることができました。卒業論文の執筆にあたっては、言語の名詞と名詞をつなぐ「属格」というもの(日本語の「の」、英語の of にあたる言葉)について研究しました。

在学中に教職課程を履修し、現在は山口市の公立中学校で教員をしています。大変なこともたくさんありますが、人文学部出身教員ならではの視点から、より専門的で楽しい国語の授業をつくっていかれたらと試行錯誤しています。

ことばとじっくり向き合っていたい人にとって、人文学部言語文化学科はぴったりの環境だと思います。視野を広くもち、新しいことにどんどん挑戦してください。

人文社会学科民俗学・文化人類学専攻(2009年3月卒業)

岩崎愛子

(新たに書いて頂きました。)

2009.4～2014.3 株式会社NTTドコモ ?2014.4～ 岡山市役所
「どう生きていきたいか」という潜在的な感覚を醸成した期間

「民俗学」は、ゆくゆくは職業に直接生かすことができる分野ではないかもしれない。しかし、職業よりもっと大切な、どう生きていきたいか、という「人生の軸」が決まって来た時に、日々の生活の中で生きてくる学問であると、今、感じている。長く向き合うことができ、人生を豊かにしてくれる学問である。



私は、大学3年生の頃に、新しいこと、人とは違うこと、とにかく自分の可能性を広げたくて島々をめぐる一人旅に出た。旅先で出会う様々な価値観をもつ人たち、言葉では表現できない美しい景色。今でもその時の風やにおいが思い起こされる。

島にはそれぞれ文化や風習があり、個別の民俗を保っている。ふと日々の自分の生活の中に目をやると、ひょんなところに日本人の民俗を感じることもある。忙しい毎日に埋れがちだが、「住まうこと」「着ること」「食べること」…生活自体を楽しむことが出来るようになれば、豊かな時間を紡ぐことが出来そうだとなんとなく大学生活の中で感じるようになった。?学問として学んでいた点としての「民俗学」が、生活の中で生きてきて線となっていた。

大学の時に、人生を豊かにしてくれる感覚に出会えたことが、私の財産である。

人文社会学科 歴史学コース (2015年3月卒業生)

益崎卓己

(新たに書いて頂きました。)

考古学という選択

なぜ、自分が考古学に興味を持つようになったのか。最近、何度も考えていることです。

私は山口大学人文学部卒業後、岡山大学大学院に在学して考古学を専攻しています。しかし、学部入学前から考古学に興味があった訳ではありません。ただ歴史が好きというだけで選んだ人文学部でした。「考古学研究室」を選んだのも、明確な目的があつてのことではありません。高校までは馴染みのなかった「考古学」という言葉に惹かれ、なんとなく選びました。当然、その頃は大学院への進学など考えてもいませんでした。

考古学を面白く感じ始めたのは、2回生の冬頃でした。きっかけははっきりしませんが、一つには、授業を通して物事に対する多様な見方を学べたことがあると思います。モノの見方を知る中で、一般的な常識が答えの全てではないことや、自ら考えて答えを探していく面白さを知りました。また、機会は限られていましたが、実際の資料に触る、発掘調査に行くなどの経験を通して、生の「考古学」を体感することができました。教科書でしか見たことのないものを初めて手にしたとき、初めて取り上げた時の感動は、この先も忘れることはできないでしょう。そうしていつの間にか、考古学に魅せられていました。



考古学を選んだこと、大学院への進学を選択したことが正解なのか、今はわかりません。しかし、好きなことに好きだけ打ち込んでいる現在の私から見れば、4年前の選択は間違いではなかったと考えています。人文学部ののんびりとした環境、その気になればいつでもとことん学べる環境は、将来に迷っていた私に合っていたのでしょう。また、考古学に興味を持って以降は、尊敬できる先生方と出会い、様々な機会を与えて頂いたことが大きかったと思います。

大学選びでは、学力や取れる資格、就職率なども重要な基準でしょう。私もそこにばかり目が向いていました。しかし、どんな雰囲気でも、何ができて、どんな先生がいらっしゃるのか、そういったことも大切だったと今になって思っています。

言語文化学科英米語文化論コース (2009年3月卒業)

香川 紀香

ダイキョーニシカワ (株)

(卒業生の声として書いて頂いたものの再掲です。)

・人文学部で何が身についたか。

疑問を持つこと、追究すること。

日常に浸透していることに対して「なぜ」と思う眼が養われます。当たり前に使っている言語にもよく見てみれば規則性があります。そしてどうしてそうなったかを突き詰めて考える力が身につきました。

・人文的教養は現在役に立っているか。

営業職としてのベースになっています。お客様との会話でちょっとしたことが仕事のヒントだったりします。なぜそのようなことを言われたかを考え、それを自社でどう解決できるか追究するようにしています。聞き流してしまうような会話も敏感にキャッチすることでお客様からの信頼を



得ています。

人文社会学科社会学コース (2013年3月卒業 民俗学・文化人類学研究室)

黒田知美

(大学時代の就活体験記の文章に新たに近況を書き加えて頂きました。)

私が採用された企業は、小規模な出版社です。出版社というと大手ばかりが知られていますが、社員も一〇人に満たない本当に小さな企業です。そんな小規模な企業ですから、そのHPを見たときも今年度の新規採用を募集しているかどうかもわからない状態でした。その

企業が、というか出している本が好きだった私は諦めきれずに採用があるかどうか尋ねるメールを会社に送りました。その後一ヶ月待ってみても返事が返って来ることはなく流石に諦めようかと思いました。

しかし、驚くほど運よく、ご縁がつながりました。説明は省きますが、ツイッターというSNSがあります。あれに何気なく呟いた「(出版社)から返事がない」という呟きを偶然企業の広報担当の人に見つけていただき、ツイッターを通じてどうしたのかと返事がきました。おそらく向こうは何かクレームだと思ったのでしょう。そのあと事情を説明すると社長直通のメールアドレスを教えてください、再度同じメールを送りました。

しかし返事は募集していないとのこと。ただ、興味があるなら一度企業見学に来ないかと誘っていただきました。二つ返事をお願いし、五月に見学に行かせてもらうことになりました。そこから私は他の企業の面接を受けながらも手当たり次第にその企業の本を読みあさりしました。大手ではないのでそこまで大量の本を出しているわけでもありませんが、最近の本や売れている本だけでなく幅広く読むように努めました。

そして迎えた企業見学の日、私は仕事内容などについて説明していただき、こうしたらもっと売れるのでは、とその企業の改善できる点を先方に可能な限り伝えました。書店でアルバイトをしていた経験から、棚で目立たない、ポップが地味だなどそんなことをです。失礼かとも考えたのですが、熱意は伝わるでしょうし、そもそも入社したい理由が、もっと売れてほしい、多くの人に読んでほしいという思いだったので。それが功を奏したのか、その企業見学の際に、一ヶ月間インターンシップに来るか誘っていただきました。

インターンシップは八月の一ヶ月間で、平日は毎日出勤しました。書店向けのポップ作りを任されたり、書店への電話営業、社員の方について営業回りに行ったり、主に私の希望していた営業関係の仕事をしました。そして、インターンシップの最終日に来年から働くかと訊かれ、現在に至ります。

私が自分の体験から皆さんに伝えたいことは、企業を知る努力をしてほしいということです。もちろん、すべての企業について調べて勉強することはできません。でも、自分が特に携わりたい業種、働きたい企業だけでもいいのでやってみてください。その企業の問題点と改善点を考えるだけでも先方に自分の熱意を伝えるには十分だと思います。

皆さんの中にはまだいきたい企業がない人やどこでもいいから就職したいという人もいでしょう。それは悪いことではありませんし、仕方ないことではあると思います。しかしこれから就職活動の中で是非働きたい企業を探してみてください。それを探すと、そこを目標とすることはモチベーションをあげるためにも有益だと思います。きっとそれも立派な就職活動の一つですから。

さて、話は変わって出版という業種についての話をさせてください。皆さんの中で出版業界に行きたいという人がどのくらいいるかはわかりませんが、文系にはおそらく人気のある業種ですし、少しはいるでしょう。出版業界に興味のない人も参考程度にご覧ください。

これから先のことを考えるなら出版業界というのは先行き明るいとは決して言えません。読書離れや電子書籍化はこれからも広がっていくでしょうし、そもそも本というのは嗜好品であり、日常生活に必須のものではありません。景気が悪くなれば財布の紐も固くなって本を買う人は減っていくでしょう。すると、刷部数も減っていき、全国の書店に流通させることが難しくなってくる。読者の目に触れる機会は減り、買われなくなり、どんどん悪循環に陥っていきます。でもそんな時代だからこそ、出版社はもっと面白い本を作っていかなければならないと私は

考えます。妥協せず面白い本を作ることがこれからの出版社には必要だと思うのです。

次は少し掘り下げて、出版業界に行きたい方向けの話をします。皆さんは出版社の主な仕事といえばどんな仕事を思い浮かべますか？

ほとんどの人が編集と答えるでしょうし、編集は出版社の花形です。ただ、編集の仕事というのは想像以上に大変な仕事です。締め切りに間に合わせるためなら例えば女性であっても残業は当たり前です。とはいえ、それでも自分がこだわって作った本が書店に並び、売れるのを実感できる喜びはひとしおでしょう。

それともう一つ、営業という仕事もあります。出版社の営業というのは何をするのかと思われるかもしれませんが。出版社の営業は、書店に直接行って自社の新刊や、流行に沿った既刊を置いてもらえるか、話をするのが仕事です。書店に置いてもらえることは売り上げに直結するので、地味に感じるかもしれませんがとても重要な仕事です。

この二つが出版の大まかな仕事なのですが、私は本が好きなら是非営業を目指してほしいと思います。本が好きなら誰でも持っている願望だと思うのですが、自分の好きな本をもっとたくさんの人に知ってほしいと思ったことはありませんか？ 友達に本を貸して読んでもらったり、おすすめて語り合ったり、そういうことが好きな人こそ営業に向いていると思います。自分の面白いと感じた本、読んでほしい本を、書店の人にお勧めするのが仕事ですから。

さて、最後に私の就活にあたっての心意気のようなものを言わせてください。

本命の会社に行くときは当たって砕ける勢いで行きましょう！ なんとかなるときは、なんとでもなるのです。

世界を広げる力

大学を卒業して三年が経ち、営業志望で入社した出版社で、私は現在編集部で書籍の製作を担当しています。編集は、著者からお預かりした原稿を種々の行程を経て書籍という形にし、読者の方に届けるのが役目です。先生方からは新しい知識を授かり、書籍の企画を立てるときには自力で情報を集める、大変ではありますが楽しい仕事です。その中で、学生時代に学んで今最も生かしているのは、物事のつながりを意識し、何事にも興味を持てる広い視野を得たことでしよう。

私は三・四年生時のコース選択で民俗学を専攻し、生活環境ごとの自然現象の呼称や農業用設備が地域社会に与える影響などを、地域を歩き、地元の方々にお話を聞いて調査・研究しました。例えば田を耕して米をつくること、そのためには水源とする川の流量や天候の把握、他の農家との兼ね合い、漁業従事者との折衝、非農家との取り決めなど、調べて聞いて多くを知ることで、さまざまな立場の人がつながり、関わりあって地域社会が形成されるのを見て取ることができました。

働いているのは自然科学の書籍を扱う出版社なので、文理で分けると理系の知識も必要になります。内容は動物、植物、土壌、環境など多岐にわたりますが、ひとつとして他の何物にも関わらないものはありません。これまで文系の道を来たため勉強勉強の日々ですが、社会に出て、文系理系で分けて「専門外」をつくるのは大変もったいないことだと気がつきました。「知らないものはつまらないもの」と自ら視野を狭め、好きなものをだけ見ていては興味を持てなかったであろう分野のものも、「とりあえず知つこうか」と楽な姿勢で受け止め知識にすれば、最後にはすべてを俯瞰してこれとこれがつながっているのか、と面白い発見があります。排泄物がおしゃれと、イカスマがベーターヴェンと関わるなんて、知っていましたか？

また、人の話を聞く楽しさも、学んだ大切なことのひとつです。地域の歴史や農作物の栽培のコツなど、研究には直接関わりがなさそうですが、そこから新たな発見があり、なにより話者の方も大変楽しそうにお話してくれるので、こちらも楽しく、貴重で面白い体験になります。これは特に、趣味であちこちに出かけて地元の人とお話しをする際に生かされています。

机に向かって勉強だけが大学の学びではありません（本はたくさん読んでほしいですが）。ぜひ外に出て、いろんな人と触れ合い、世界を広げてみてください。

人文社会学科哲学・思想コース(2014年3月卒業)

篠原庸輔

(新たに書いて頂きました。)

人文学部の人文社会学科で美学を専攻していました。哲学や思想で論文を書く学生は本当に自由なテーマを掲げていました。

私自身もクラシック音楽が好きでサークル活動も学生オーケストラに入り、卒論も好きなクラシック音楽の作曲家について書いていました。先生方も本当に一人一人に丁寧に参考文献を紹介して下さった的確なアドバイスをしてくださいました。趣味にもつながる好きなテーマであれこれ思考、研究できるのはきっとここだけではないでしょうか。

研究室の学生たちとは積極的に話せばいろんなことを話し込めるような、そして横のつながりがひろがりさらに楽しくなります。同じ趣味嗜好を持った学生が集まっているしきつとすぐ見つかります。みんなで夜遅くまでくだらないことで盛り上がることもしばしばでした。

人文学部は就職に無縁そうなイメージが持たれがちですが私も卒業後はちゃんと定職についており、結婚式場で一度にたくさんのお客様を接客しております。そして稼いだお金を念願のマイ楽器を手に入れてもう一度オーケストラ活動ができるように時間を見つけて練習をしています。

人文社会学科哲学・思想コース(2012年3月卒業)

濱田茂明

山口大学職員

私は2012年4月から山口大学で事務職員として働いています。その経験をもとに国立大学職員、公務員を目指す方の為に、私自身の公務員試験体験記をお伝えします。

私は大学生協の公務員講座を3年の5月から1年間受講しました。公務員試験は科目が多く、最初はその日の宿題・復習だけで一杯で勉強時間も少なかったです。そのため成績が悪かったので12月の終わり頃から本格的に勉強を始めました。その際何時から何時までは勉強時間、というような1日の大ざっぱな勉強計画を書いた紙をテレビ画面に張り付けて勉強していました。また、その日勉強した科目名をスケジュール帳に書き込んで、自分の勉強が偏っていないかの確認もしました。

次に1~4年の頃に自分が公務員試験の為に何をしていたかについてです。1年の頃は公務員試験の為にということは特にしていません。大学法人や山口についての授業をもっと受ければ良かったなと思いま



す。2年の頃も同様です。3年の頃は夏に山口県庁へインターンシップに行きました。山口大学はインターンシップの公募はしていませんでしたが、後で聞いたところ、自分で大学へ問い合わせたインターンシップに行った方がいたようです。自分が本当にインターンシップに行きたい官庁・企業があるならそのように積極的に動くのが良いと思います。その他にも官庁の説明会はできる限り行って情報収集を行いました。また、そうした説明会で質疑応答の時間があれば必ず一つ質問するようにしました。4年の頃は先述のとおり公務員試験対策の勉強をしていました。

そうした中、公務員試験で最も重要だと感じたのは志望理由です。公務員は安定しているから、という理由で志望される方がいます。もちろんそれも立派な理由だと思いますが、周りを見ているとそうした気持ちだけで受かるのは難しいのかなと感じます。なぜ自分はそうした「安定」というものに魅力を感じるのか、そして、公務員は本当に安定しているのか、どのような意味で安定しているのか、等といったことは良く考えてみてください。

最後に、就職してからのことを少し書きます。採用後私は課外活動や奨学金・授業料免除を担当する部署に配属されました。そこで3年間働き、現在は会計を担当する部署で働いています。このように大体3年ごとに部署異動があり仕事が変わり、また仕事の幅も広いので、様々な経験を積みたい方は是非大学職員を選択されることをお勧めします。

就職体験記

人文社会学科哲学・思想コース(2015年3月卒業)

村上賢一

(新たに書いて頂きました。)

はじめまして。山口県の公立高等学校教員として働かせていただいています。そう聞かされると教育学部卒のように思われるかもしれませんが、歴とした人文学部卒です。なぜかと問われれば、入学当初は教員という職業は進路選択の1つにしか過ぎなかったからです。私は将来何になるかよりもまずは自分のことを知りたいと思いました。私たちは自分以外のことにはよく目を向けがちですが、自分のことはよくわかってない。しかし、私たちが住んでいる世界も、もっと身近に言えば社会や家族生活も基本的には人間集団です。自分がいずれ就職して社会に出て行くことを考えれば、自分というものを、もっと言えば



人間というものをよく理解していないと。そう思って人間の本質的な部分を垣間見える人文学部を選びました。そういう意味においては「就職に有利だから理系です」というような学問を手段として使っている感覚と変わらないのかもしれませんが、なにが有利かは分かりませんが、結局は捉え方次第です。自分の中で何をしたいのか、どういう意味があるのか、どうしたいのかを明確におこななければ何をやっても変わらないと思います。大学選択も学部選択も職業選択もすべて選ぶという行為が伴います。ですから、就職活動をする際も同じですよ。きちんと自分の中で判断基準を持ち、その理由を述べられること。これが大事です。これができなくては何の選考も通らないでしょう。あと大事なのは人間力ですね。仕事というのは常に個人としてではなくチームとして動くことになります。必然的に人間力があるわけです。これは自分で磨かなくてはなりません。それは大学4年間を通して十分に磨けると思います。

最後に、参考までに私がどうして教員を選んだかを話しておきます。私は数ある中で他人の人生に関われる仕事がしたいと考えていました。そこにやりがいを見出していたわけです。その基準に沿って行き着いた先が今の教員という立場です。私の勤務先は工業高校のため、生徒の多くは卒業すると就職します。それは今まで自分が身を置いていた環境とは全然違うものです。社会人としての経験も浅く、知識も無い私にとって日々の業務というのは大変なもので、辛いこともたくさんあります。しかし、生徒と関わる中で自分も共に成長できる。生徒に教えることだけでなく、教えられることもある。それは他では得られない貴重な経験です。少しでも興味がありましたらぜひ教員を目指してみてください。みなさんが充実した日々を送られることを祈っております。

言語文化学科中国語学・中国文学コース(2013年3月卒業)

藤井浩子

JR 西日本

(大学時代の就活体験記の文章に新たに近況を書き加えて頂きました。)

近況

現在、広島で在来線運転士として働いております。お客様の尊い命をお預かりしている責任を実感しながら安全運転に努めています。私が入社時に思い描いていた、日本の鉄道の安全性の高さ、正確な運行を支えたいという想いにダイレクトに関われる業務なので、日々やりがいを感じています。初心を忘れず、お客様に安心、信頼していただける運転士になれるよう、これからも技術技能を磨きたいです。

4年次就職試験体験談

はじめに

みなさんこんにちは。はじめまして。言語文化学科中国語学・中国文学コース4年の藤井浩子です。私はJR西日本(西日本旅客鉄道株式会社)の事務系総合職 鉄道 エリアコース中国で内定を頂きました。

私の就職活動の体験が少しでも皆さんの背中を押せるように今日は5点についてアドバイスをしたいと思います。

就活は自分の人生を考える絶好のタイミングです。自分は公務員だな、教員になりたい、一般企業に就職したい、皆さん何となく周りに流されていませんか? 私が3年生と話していると、周りがこうだから自分もこうするという考えの人に多く出会います。今からでも遅くないです。なぜ民間企業に就職したいのか、または公務員教員になりたいのかももう一度よく考えてみてください。それが就活でよく言われる「軸」となります。

ここからは具体的に私の就職活動の体験をお話します。

1. 軸を知る

私は就職活動を始める時にはすでに明確な軸を持っていたので、何がやりたいのか分からないとあまり悩みませんでした。

私の軸はざっくり「鉄道」でした。

なぜ鉄道なのかというと、私は北京に1年留学している間に日本のインフラがとても優れていることに気付いたからです。中国は経済力をつけてきたとはいえ、まだまだ発展途上の国です。電気や上下水道など都市で生活していても十分ではないことが多々ありました。

留学中外国の友人と話していると、日本の技術を褒めて貰えることがよくあります。そこで私はインドネシアやルクセンブルクの友人から「日本の鉄道はすごい。新幹線は私たちも知っている。とても早いんですよ?」と言われたことが強く印象に残っています。そして北京から中国各地へ旅行をする際に長距離寝台列車を使うことが多く、日本だったら日帰りも可能な距離を夜間に移動しなければならない不便さも身をもって体験しました。

そして留学が終わった頃ちょうど北京上海間の高速鉄道が開通し、事故が起きました。その映像を見て、安全だと言われている日本の鉄道インフラを世界へ広めていける仕事、または鉄道の安全に関わる仕事を目指すようになりました。もしもまだ明確に就職活動の軸が無いという人がいたら、もう一度よく考えてみてください。過去の体験から自分がどんなことでやりがいを感じたか、どういうことに使命感や達成感を覚えたのか。それが軸を見つけるヒントとなります。

2. 業界を知る

私は鉄道に関わる仕事は何があるだろうと考えました。JRや私鉄などの鉄道運行会社はもちろん、日立製作所や川崎重工などの車両メーカー、三菱電機や東芝などの鉄道の電装品といった部品メーカー、駅舎やトンネルなどを作るゼネコン。こういった企業を中心に私は就職活動を行いました。

鉄道と一つ言ってもそれに関わる企業はたくさんあります。自分が気になる業界が思いもよらない別の業界と深く繋がっている場合もあります。業界地図や就職四季報で基礎知識を蓄えてもまだよくわからないと思ったら、雑誌の「東洋経済」や「週刊ダイヤモンド」といった経済雑誌を読んでもみると、就活といった視点ではなく業界を見ることができるのでお勧めです。これらの雑誌は就職支援室に置いてあります。日経新聞を読むのもいいですが、もし経済用語など分からない事が多いと思ったら、就職支援室が主催している「新聞の読み方講座」を利用して下さい。昨年では「TPP」や「社会保障と税の一体改革」「スマートグリッド」などの時事問題から、業界の解説とその業界で話題になっている時事を分かりやすく厳しく教えてもらえました。

3. 企業を知る

実際に就職活動が始まったら企業説明会に参加することが多くなると思います。

そこで一点注意です。最近説明会と言わずに「オープンセミナー」「社員座談会」などと呼ばれるものが実際説明会だったりします。12月にナビがオープンしたら、頻繁にチェックするようにしてください。予約が取れずに参加できないのは勿体ないです。

企業説明会に参加したら、少なくともその企業のやっている事業はなんとなく理解できると思います。私は説明会では一番その会社の雰囲気を感じるようにしていました。本当にここに入ったら楽しくやっているのか、それは説明会に行っても空気を感じないと分かりません。積極的に質問をし、直接社員の方と話してみてください。

質問の場では、もしも説明を聞いただけでは分からなかった場合「御社の強みは何ですか」と直接聞くようにしていました。実際に働いている社員さんが感じる強みはエントリーシートを書く時のヒントにもなります。また、「ライバル会社はどこですか」という質問も業界研究に役立ちました。その企業に入りたいという意思表示をする時（エントリーシート、面接での志望動機）に強みに共感したからというのは一つの手となります。

大きい企業だとたくさんグループ会社があります。そういうところを狙うのもおススメです。

4. 職種を知る

就活とは人生を考えるとこだと冒頭でお話しました。

企業には総合職と一般職というものがあります。総合職は将来的に会社の経営に携わるため、全国転勤があることも多いです。一般職はサポート的な役割が多く、責任ある立場に上り詰めるために時間がかかることもあります。その反面定住して仕事ができるなどのメリットもあります。JR西日本では鉄道運行に専門的に関わるプロフェッショナル職というのがあります。これが他社でいう一般職です。プロフェッショナル職は入社後駅員または運転士、司令員などの専門職を目指します。ずっと現場で働きたい、長くお客様と接したいと思うならプロフェッショナル職を選ぶのがいいでしょう。しかし私はやはり多くの人に影響を与えたいと思い総合職を希望しました。人事や教育の仕事に就くことで現場の社員に影響を与え、その人たちが何万人ものお客様に影響を与えることができると考えたからです。

総合職の選考が終わった後一般職の選考が始まることが多いので、併願できることがあります。一度お祈りされたとしても、どうしても入りたい企業があればもう一度チャレンジすることも可能かもしれません。よく調べてください。そして営業、総務、人事、経理などいろいろな職種がありますが、自分がその会社に入ってからどういう風に活躍したいのかも明確にしておくべきです。私はメーカーでは営業、鉄道運行会社では人事教育面がやりたいとその企業ごとに変えていました。それぞれに企業でやりたいことは別だと思うので、エントリーする時点でよく考えてみて下さい。

5. 自分を知る

入社したい企業が決まっても自分をアピールできなければ意味がありません。ここからは自己分析、エントリーシート、面接といったお話をします。

まず自己分析です。自己分析は一人でやらず、友人や先輩後輩、就活仲間と行ってください。この時期自分の弱点ばかり目に付いてネガティブになります。企業はあなたがどんないい所を持っていてそれをどう生かしてくれるのかを知りたいがっついています。それを整理出来ればエントリーシートや面接で悩むことはなくなります。

具体的に私のPRを例にお話しします。

エントリーシートでも面接でも論理的に簡潔に物事を伝える能力を試されます。

「自己PRをして下さい」と言われたらとにかく論理的に短くポイントだけを伝えてください。次の順で表現するとより簡潔に伝わります。簡潔にポイントを述べる（例：私の強みは「自分の目・耳・足で確かめる行動力」です。）

それを具体的に証明できるエピソードを述べる（例：北京に1年間留学した際、上海など都市だけではなく、地方の現状も知りたいと思い、ハルビンや四川など8つの地域へ足を運びました。）

そこから得た結果や成果を述べる（例：そこで地方ではまだまだ電気や交通インフラが整っていない現実を目の当たりにしました。この経験から実際に自分の足で行動する大切さを学びました。）

その力を受験企業で生かせることをアピールする（例：この力を生かして御社でも現場に多く足を運びお客様や社員の声に耳を傾けます！）

400字程度がちょうど1分間で話せる内容なので、あらかじめテンプレートを作っておくと便利です。自己PRは何人もの他者に聞いてもらって洗練させてください。このPRさえ完成させておけばエントリーシートでも面接でも困ることはありません。気になった点があれば面接官から質問して下さい。その時にもう少し丁寧に説明できれば問題ないです。

面接は慣れです。就職支援室で練習会があるので積極的に参加して下さい。そして自己PRで悩んでいるのなら、就職支援室や人文学部が行っているキャリアカウンセリングに行ってください。学校の支援は有効に利用するのが自己成長への近道です。

さいごに

就職活動を始める際には自分がどこでどういうふうに働きたいかをよく考えてください。

やはりご両親とも話し合うことが重要です。親子で認識の違があると後々自分が苦しくなります。ご両親は大学まで出したんだからといって有名企業の名前を挙げるかもしれません。人文は女性が多いので地元の近場で就職して欲しいという人も多いでしょう。しかしこれは自分の人生です。家族と意見が違えば、まずそこから説得して下さい。

そして就活仲間を作るでもいいし、もとの友人、先輩後輩先生でもいいです。とにかく人と会って話してください。何気ない話から自分の良い所が見つかるかもしれません。他人から見た自分の評価はとても役立ちます。

家族や友人の支えは就活中またはそれ以降の人生の財産となります。

就職活動の成功は内定をいくつ取ったということではありません。自分が本当にやりたいことができる会社に就職できたことです。

みなさんの就職活動が成功することを願って、私の話は終わらせて頂きます。ありがとうございました。

人文社会学科 哲学・思想コース(2014年3月卒業)

白男川晴菜

(新たに書いて頂きました。)

近況：

「さまざまな業種や活動に従事する人と接する仕事はやりがいがあります。今は芸術・文化に関連する取材を主に行っており、地域の

芸術家と関わるなかで新しい考え方を学ぶこともしばしば。絵画や陶芸、手工芸など幅広いジャンルの作家さんと実際にお会いしてインタビューする時間は楽しいですよ。大学に入ってからのいろんな人と接するうちに、新しい夢や目標が生まれるかも。山大で素敵なキャンパスライフが待ってるよ。

人文社会学科 哲学・思想コース（2013年3月卒業・2015年3月修了）

中山 武

（新たに書いて頂きました。）

平成24年度卒業生の中山武と申します。私は人文学部の哲学思想コースで、主に宗教学・美学を専攻しました。通常「人文学」部といえば基本的に扱うのは文章であることが多いのですが、私が専攻した分野では映像作品やイベントなど現代社会における様々な文化的事象も題材にして研究することができ、学生が主体的にユニークなテーマを設定できる自由活発な雰囲気を楽しみながら学ぶことができました（なお、私が何を研究題材としていたかは写真にてご確認ください）。

私は人文学部卒業後さらに大学院で2年ほど研究を進めた後、今年の4月から地元で公務員をしております。今担当している仕事で、人文学部で学んだことが直接役立っているわけではありませんが、研究をする上で身に付いた主体性や発想は仕事をする上でとても役立っています。また私はイベントの取材などを通して様々な方と知り合う機会を持つことができました。世代や立場の異なる方との交流は自分の知見を大いに広げてくれただけでなく、社会人となった今も交流を続けていることで、仕事に役立つようなアイデアを与えてもらえることもあります。

社会に出る際には「何を学んだか」だけではなく、「どう学んだか」についても評価のポイントとなります。自由度の高い人文学部では学び方にも一人一人様々なカタチがあり、主体的と独創性を意識して研究に取り組むことで、他の誰にもない新しい視点と経験を持って社会に飛び立つことができます。

とにかく何か好きなもの・心に引っかかるものがある人や自分の個性を発揮したい人はもちろんオススメです。興味があっさりしないという方も、学内で出会う人の考えや生き方に触れることで何らかのヒントを得ることができるかもしれません。

人文社会学科 歴史学コース（2015年3月卒業）

平岡美沙

（新たに書いて頂きました。）

みなさんはじめまして、私は人文学部歴史学コースで幕末の長州藩（昔の山口県）を研究していた平岡美沙と申します。

私は今年の4月から山口県庁で働いています。そこで、今回は私の就職活動体験と近況について話をさせて頂くとともに、人文学部を目指す皆様方の参考になれば幸いです。

私が山口県庁を目指すことを決めたのは、大学二年生の後期でした。それまでは元々幼い頃から好きだった日本史、それも特に興味があった幕末の長州藩について堂々と学べるとあって、そちらの方に力をいれ、ほとんど就職に向けた活動をしていませんでしたが、周りの就活モードに引きずられる形で就職について考えるようになりまし

た。

しかし、考えてみたのはいいものの、実際にどこに就職したいのかという明確な答えが思いつきませんでした。なぜなら、当時の私はそのころ、就職選別に重要な「自分は何をしたいのか」ということが見えていなかったからです。確かに、研究などは楽しかったのですが、これを仕事に出来るかと言われれば、それほどまでに自分の力量がないことは分かり切っていましたし、何より、本当にそれを仕事にするような研究職などにになりたいのかと言われるとそれは少し違うような気がしていました。しかし、歴史以外になにかしたいことがあるかと聞かれば、ないとしか言いようがなく、自分が何をしたいのかさっぱりわかっていなかったのです。

だから、私はまず、本当に何がしたいのか、何を仕事にしたいのか、そこを突き詰めて考えることにしました。その結果、私がしたいのは、歴史に直接対峙する研究職ではなく、歴史で物語を作ったりするような、歴史と関わるような仕事をしたいということではないかと思うようになりました。

そこで、私はその「歴史と関わる仕事」を軸に仕事を探そうにしました。そうして候補に挙がったのが山口県庁でした。山口県庁では当時から観光に力を入れる政策を打ち出しており、その目玉の一つとして歴史観光を打ち出していたからです。

ただ、候補とするには少し不安もありました。山口県庁は確かにこのような私の興味がある政策をしていますが、あくまで県民の生活向上のための組織なため、ここ以外にもたくさんの仕事があり、希望通りの職場に行けない可能性の方が遙かに高かったですし、なにより普段よく使う市役所などは違い県の組織ということで実情がどのようなものかわからなかったからです。

そのため、これらのことを確かめるためにも、私は山口県庁へインターンシップに行くことにし、商工労働部という私が希望する観光や山口県の産業、交通に関して取り扱っている部署に一週間お世話になりました。そうして一週間インターンを終え、私は、希それ以上に他の部署の仕事もやってみたいと思うようになりました。なぜなら元々行きたかった歴史を題材にした観光をつくるという仕事自体もおもしろかったのですが、それ以上にどの部署にも共通していた、山口県の方針を決めるという大きな枠組みをつくる仕事がおもしろそうに思えたからです。それは、たとえば、山口県の観光政策を行う必要があるとき、実際に何を目玉に観光を行うのかまず考え、その目的を達成するための細々な基準をつくらせたり支援を行ったりするといったような、将来県をどのようにしていくのかを決める仕事であり、このような、県全体を決める仕事は、私が希望していた歴史とは関わる仕事ではありませんでしたが、とてもやりがいがある仕事だと思いました。

今、私は山口県庁でとある給付金の審査業務を担当しています。この仕事は私が最初に望んだものではありませんが、とてもやりがいがある仕事だと思っています。

そう考えると今、進路を決める時に必要なのは今自分が何をしたいのかを徹底的に考えて、そのしたいことを目指すことではないかと思っています。だから、もしあなたが人文学部で心から学びたいと思うことがあるのであれば、ぜひ目指してみてください。

言語文化学科 日本語・日本文学コース（2013年3月卒業）

河田奈結

私はこの度、高等学校教員の内定をいただきました。来年度から、

第一志望にしていた地元で念願の教壇に立ち、国語を教えることになります。

私は、恩師との出会いを契機に、高校生の頃から教員を志すようになりました。当時の私がそれでもなお、教育学部ではなく、人文学部を進路として選択したのは、専門性を十分に磨きつつ、教職の勉強もできる点にメリットを感じたからです。もちろんこの四年間、多くの単位数が必要となる辛さや、教育学部生に対する引け目を全く感じなかったわけではありません。しかし、強い気持ちを持って、普段の専門的な勉強と教職課程の勉強に刻苦勉励していれば、それが必ず自分の血となり肉となることを、今回身を以って知ることが出来ました。大学生活で得た粘り強さと多くの知識を活かして、来春からも一層研鑽を積んでいきたいです。

言語文化学科 日本語学・日本文学コース (2015年3月卒業)

三村咲乃

広島県教員

私は高校教員の内定を頂きました。春から地元で教壇に立ち、国語を教えていきます。私は高校時代の古典の授業で古典の面白さに触れ、古典の授業を行うことのできる高校の教員を志望しました。このような経緯があったため、中学校教員の免許は取得しませんでした。しかし、就職活動を終えた今、自身の可能性を広げるためにも、中高両方の免許を取得しておくべきだったと思います。中高どちらかで迷っている人は両方の取得を目指すことをお勧めします。特に教育実習に2回も行くことができるのは、人文学部の学生にとってとても貴重な経験になると思います。採用試験は、主に学力を問う一次試験と面接等で人間性を問う二次試験の2つの試験が行われます。一次試験に関しては、過去問等でしっかり情報収集を行ったうえでの対策をするべきだと思います。同じ自治体を受験する人同士、情報交換や進捗報告をすることでお互いの励みになると思います。二次試験は、面接や集団討論のように一人ではなかなか対策の出来ない試験になります。私は同じように教員を目指す友人とグループを作り、対策を進めていきました。このとき他教科・他校種の人にも声をかけるといいと思います。特に模擬授業では、その教科が専門ではない人の意見をその教科が苦手な生徒の意見であると考え、対策をすることが出来ました。また、面接試験はどの自治体においても配点が高く設定されています。自分が教員になりたいと思った理由や、実際教員になった際のような教育を行いたいかについては、自分の核となる部分を確立しておいてください。私が就職活動全体を通して一番大切だと思うのは、一緒に努力したり、困ったときや悩んだときに相談したりすることの出来る人を見つけることだと思います。就職活動は長丁場です。途中で心が折れそうになったり、気持ちが緩んでしまったりすることもあると思います。そんな時には周りに相談してください。将来どの職に就くことになっても、周りと協力して物事をやり遂げる力は必ず必要になると思います。これから採用試験まで長い道のりになります。仲間と支え合いながら就職活動を乗り切ってください。

交換留学生留学体験記

人文社会学科社会学コース

平井優香

私は1年間、韓国・仁荷大学校に交換留学しました。

韓国で暮らした1年を振り返ると、「行ってよかった」という思いしかありません。4年での留学なので就職活動や卒業時期の不安もありました。ですが、韓国で泣き笑い、友人と共に過ごした日々は、私にとって一生忘れることのできない貴重で大切な日々となりました。自分となじみのない所で暮らし、様々な考え・文化・宗教を持つ人と出会うと何かしら衝撃を受けます。軍隊に行ってきた友人、イスラム教のルームメイト、日本語を学ぶ会社員や主婦の方、多くの人と韓国語で話をしました。外国語で自分の考えを話せるようになるなんて考えてもいませんでしたが、話せるようになったので不思議です。そして、ものの見方や考え方が多様になった気がします。

今、日韓関係は決して良好だとは言えないかもしれませんが、この留学を通して出会った人々とはこれからも交流を絶やさないでいたいと思います。小さなことですがそうやって日韓の懸け橋になればいいと思います。もし今、留学を考えている、迷っている人にはぜひ勇気を出してチャレンジしてほしいです。留学中にしかできない経験、出会えない一生の友人が待っていますよ。

言語文化学科英語学・英米文学コース

橋本 有未

(学生時代の文章に加えて、新たに書いていただきました。)

高校の英語教員として必要な英語力を身につけたことに加え、留学体験そのものが生徒の指導に役立っています。

カナダ留学体験記 2009/12/16

橋本 有未 (はしもと ゆみ)

外国の文化を直接見たい、大好きな英語をもっと勉強したいという思いから、私は1年間カナダのリジャイナに留学することを決めました。リジャイナは街の中に大きな湖があったり郊外にはキャンノーラがあったり、自然がきれいでフレンドリーな人ばかりの町でした。1年間ホストファミリーにお世話になりながら最初の9カ月は留学生用プログラムに通い、残りの3カ月は大学に聴講生として登録して学校の授業を受けました。学校では韓国人、中国人、サウジアラビア人など多くの留学生に出会いました。彼らと英語と一緒にグループワークをしたり雑談したり相手や自分の国について会話をするだけで刺激を受ける毎日でした。母国語やバックグラウンドが違うにも関わらず、英語を介することでコミュニケーションがとれることが本当に嬉しかったです。家ではホストファミリーとの会話やカナダ家庭の料理を楽しみました。ホストファミリーはいつも根気よく話を聞いてくれました。イースターやカナダディやクリスマスなどのイベントでは一緒にお祝いをしたり、ホストファミリーはカナダの文化を私に教え、体験させてくれました。各学期の間の休みにはカナダを旅行してまわりました。ナイアガラの滝を見たりカナディアンロッキーでスノーボーディングをしたり、壮大な自然を満喫しました。さまざまな人と接し、多くのことが学べたリジャイナでの生活は内容が濃くて毎日がとても楽しかったです。この留学で、日本にいてはできないようなことをたくさん経験し、吸収することができました。カナダ留学で得た経験は私を精神的に大きく成長させてくれたと思います。他の国からの留学生の友達と話すことで客観的に日本を見ることができるようになり、今まで気付かなかったことに気付きました。

また、違う国の人と話すことで、無意識にもっていた固定観念を取り払って人と接するようになり、遠い国と思っていたものが近くになりました。リジャイナに留学して自分の視野が大きくなり、違う言語・価値観をもつ人と国籍を越えてコミュニケーションをとれるようになったことで英語がもっと好きになりました。自分の責任も大きくなり、その緊張感からいい方向に自分が変わったと思います。留学を諦めようかとも思ったことがあったし留学中もつらいことがあったりもしたけど、得たものが多く本当に行ってよかったです。

言語文化学科独仏語文化論コース

山口渚紗

(学生時代の文章に加えて、新たに書いていただきました。)

大学生活の1年間をドイツのエアランゲンで過ごせた事は、私の人生においてかけがえのない貴重な経験となりました。様々な文化に触れ、いろんな国の人と出会う事で視野も広がります。一生ものの友達もできました。

就職活動でも、「自分はドイツでこんな経験をしました！」と自信を持ってアピールできましたし、多少の事ではへこたれない神経の図太さ(いい意味で)も身に付いたと思っています。

現在は製薬メーカーでMR(医薬情報担当者)という仕事をしています。ドイツ語を使う仕事ではありませんが、フットワークの軽さとコミュニケーション能力は留学生活から身に付けたものだと感じています。

せっかくの大学生活ですので、思い切って今しかできない経験を沢山してみてください！

言語文化学科独仏語文化論コース4年

山口渚紗 (やまぐち なぎさ)

私は2008年3月から2009年2月まで、ドイツのエアランゲン・ニュルンベルク大学に留学していました。エアランゲン大学は、施設の一部に古いお城やその庭園が使われている、とてもドイツらしい大学です。エアランゲンという街は、規模も大きくなく、のんびりとした時間がながれる素敵な街です。

大学での授業は、留学生のためのドイツ語コースが中心でした。クラスにはもちろん日本人だけではなく、中国人、アメリカ人、アイルランド人、チリ人、スペイン人、イタリア人、ハンガリー人、インド人…などと、実に様々な国からの留学生がいました。授業でお互いの文化について紹介し合う機会も多く、ドイツ語以外にも学ぶことの多い充実した内容でした。また同時に、日本の文化について改めて見つめなおすこともでき、今までと違った角度から考えることができるようになったと感じています。

エアランゲン大学にある日本学科では、たくさんの学生が日本語を学んでいます。日本学科の学生と私たち日本人留学生の交流はとても盛んで、授業や生活の中で困ったことがあれば快く手伝ってくれて、プライベートでもよく一緒に遊んでもらっていました。また逆に、私たちも彼らの日本語の勉強を手伝ったり、日本のリアルな情報を伝えることもしていました。日本学科の学生は本当に勉強熱心で、彼らの日本語の上達の速さに、たびたび私も刺激を受けていました。学生たちの様子は、去年、日本のテレビ番組「笑ってコラえて！」でも取り上げられたので、見た方はわかっていたかと思います。ドイツで出会った学生とは、帰国後の現在も交流が続いており、何人かの学生とは日本での再会も果たしています。

授業以外では、ドイツ国内外を頻りに旅行し、年末年始はドイツ人の一般家庭にホームステイできるプログラムにも参加しました。旅行では、ドイツだけでなく、様々なヨーロッパ諸国を訪れることで、ヨーロッ

パ文化を肌で感じることができ、教科書でしか見たことがなかった世界史の世界を自分の目で見ることもできました。ホームステイでは、日本とは全く過ごし方が異なるドイツでの年末年始を過ごすことができ、とても興味深い、貴重な体験となりました。

この一年間の留学生活で得たことは非常に多く、ここには書ききれないほどです。日本では出会うことのなかった人との出会い、日本では経験できなかった出来事、日本にいたら見えてこなかった、「外側から見た日本」。どれも私の今後の人生の糧となってゆくと思っています。

在学生の海外語学研修体験談

山口大学人文学部での学びについて—海外語学研修を通じて 人文社会学科 歴史学コース 3年 M.A

山口大学の人文学部が展開する学習活動の一つに、学部が支援する「短期海外語学研修」があります。私は大学2年生の春休みにこのプログラムに参加し、貴重な体験をすることができました。

この語学研修は、春休みの4日間に行われ、台湾の東呉大学という大学へ、10名の学生と引率の先生1名とともに訪れました。目的は、「日本よりTOEICの平均点が数十点高い台湾の“英語学習”の方法を学び、学生自身がその経験を今後の英語学習に役立てること」でした。研修は人文学部からの資金援助や事前学習のサポート、先生の引率もあり、初めての海外でも安心して渡航することが可能です。

台湾での具体的な研修内容は、ボランティア学生の案内のもと、英語クラスへ参加することでした。①英語を使ったキャンパス案内、②小グループで進行など役割を定め、テーマに沿って討論形式で話し合っていく英語による「国際会議実習」、③図書館・言語学センターの同時通訳ルームでの同時通訳など多くの講義を体験しました。講義外においても各学部や台北市内のツアーをしていただき、台湾学生との関わりが豊富に設けられ、英語を用いる機会を多く得ることができました。

この研修は、英語学習の改善はもちろんのこと、英語を話したいという内発的な動機を私に与えてくれました。英語交流の実体験は悔しさ・感動を伴い、積極的に優秀な台湾の学生との交流から、「個」として自分の考えを持つことが重要だと実感しました。異なる環境での気付きは英語学習のみならず今後の歴史学コースでの研究や卒業後さまざまなものを模索していくうえで役立つことと感じています。

人文学部での学びの一端ではありますが、私の経験が高校生のみ皆さんの参考になれば幸いです。

2012年実施台湾海外調査研修 東呉大学 言語文化学科 2年 H.Y

海外の英語教育の実態を調査するにあたって、台湾の二つの大学で研修を行いました。英語の授業に参加する中で、そのレベルの高さに驚かされました。まず、どちらの大学でも授業はほぼ英語を使って進められていました。日本の大学ではあまり見られないような少人数クラスで、どの生徒にも英語で発言する機会が多くありました。また、グループごとに英語でプレゼン、英字新聞を使つてのワークが課せられ、聞くだけでなくより活動的な授業であるという印象を受けました。授業の中ではこちらの学生とあちらの学生がコミュニケーションをとる時間を設けていただき、自己紹介やインタビューなどを通して会話を楽

しむことができました。

淡江大学の授業に参加させていただいた際には、生徒が自ら挙手して発表する姿が多く見られました。クラスのほとんどの生徒が授業の中で数回発言していたように思います。生徒が先生の質問に回答し、正解するとほかの生徒が拍手しており、クラスの雰囲気も大変良いと感じました。この雰囲気が生徒のやる気を高め、英語を話すことへの抵抗を無くしているのではないかと思います。授業内容はとても充実したものであり、先生方の表情や生徒への対応からは熱心さが伝わってきました。日本の大学が見習うべき点ばかりでした。

あちらの学生へのインタビューで、発音や聞き取りの練習はどうしているかと尋ねたところ、洋画を観たり洋楽を聴いたりしているという回答が多くありました。これは授業外のことですが、普段から英語に触れるという習慣が大切であると改めて感じました。どの方もこちらの拙い英語を真剣に聞いて、丁寧に回答してくださり感動しました。

授業だけでなく、食事や観光を共にすることでより深いコミュニケーションをとることができました。その中で、言葉が思うように出てこず、もどかしい思いをすることが多々ありました。これは自分の英語力の低さを痛感することにつながり、英語を学んで更にスムーズな会話を楽しみたいという欲が生まれました。

また、学生に限らず台湾の方々には日本人の私たちにとても気さくに、親切に話しかけてくださいました。中には日本語を話すことのできる方もいらつやいました。日本に比べ、台湾では外国文化が身近にあり、外国語が自然に出てきているように感じました。

今回、四泊五日という短い研修期間でしたが、大変貴重な経験を得ることができました。この研修に参加することができて、本当に良かったと思います。これからの英語学習の意欲向上だけでなく、人と人とのつながりの大切さを実感するという大きな成果がありました。引率して下さった先生方はもちろん、あちらの大学の先生方や生徒の皆さん、この研修に携わって下さった方々に深く感謝いたします。ありがとうございました。

海外研修 台湾東呉大学

人文社会学科 社会学コース 2年 O.R

台湾の東呉大学へ英語の調査を行い、日本の大学生と台湾の大学生の英語力には差があることを実感した。英語の授業に参加して、台湾の先生による授業内容の工夫や、台湾の生徒の授業に対する姿勢を見て、日本で私が受けてきた授業との違いを感じた。

私が東呉大学で受けた英語の授業内容は非常に興味を持てるものであった。先生は黒板や机、教科書だけでなく、常に生徒と向き合い授業を行っている。そして、いつでも先生は生徒からの受け答えができるよう教卓のそばではなく、生徒の中に入っていた。生徒は分か



らない点があれば、すぐに手を挙げ、先生に質問をしている。先生の工夫も見受けられるが、生徒の授業態度は、積極的で、先生の指示には真面目に答えている。また、授業中に先生から生徒に対して発言の場を持たせると、生徒は何かしらの回答をしている。先生と生徒の間にはコミュニケーションがあった。授業は全員が一体となっており、生徒はそれぞれが授業を楽しんでいるように感じた。

私が東呉大学で受けた英語の授業内容は、図書館に置いてある英字新聞の記事を使用したものであった。二人一組のペアになり、新聞の中にある記事を見て、先生から出された新聞の内容に関する問題に解答するものであった。生徒が渡される新聞は、それぞれ違う日付のものであり、生徒の解答内容にも違いがある。自分たちで英字を読解して、記事を探すことは英語力が身に付くだけでなく、最近の世界の情勢も知ることができる。生徒自身も適当に解答するのではなく、先生に質問をしながら一つ一つ丁寧に解答を行っていた。また、淡水大学で受けた授業では、先生が発する英文を生徒も発するものであった。先生は全く黒板と教科書を使うことなく、生徒と対面していた。口を動かすことで生徒の英語の発音はよくなるだろう。また、生徒が英語教科書のテキストを読む時間を与え、その後にテキストを閉じて、先生が台湾語で生徒に質問をするものであった。その質問に回答する際に生徒が手を挙げて、先生があてるといったものだった。回答があつていれば、先生はその生徒を褒め、生徒はその回答者の生徒に拍手をする。拍手をする行為は同意を示すものであり、生徒の自信にもつながるだろう。

英語の授業を受けて一番強く感じたことはコミュニケーションを重視していることである。日本で授業中に先生と生徒、生徒同士の会話や発言が見られる場合はディスカッションや、プレゼンテーションであろう。しかし、台湾の授業には常に発言の場がある。私は、台湾と日本の大学生の英語力に差が生じているのは、英語に触れることのできる授業内容に違いがあるからだと考えた。

海外調査研修の感想

人文社会学科 2年 社会学コース HA

海外調査研修に参加して、多くの人と関わり、さまざまな考えを知ることができました。台湾の学生をはじめ、普段はあまり関わる機会が少ない、自分と異なる学年や学科、コースに所属する人々と共に考え、行動することで、自分を大きく成長させることができたと感じます。また、海外渡航の経験が豊かな先輩から多くのことを教わり、「自分ももっと国際交流したい！」と刺激を受けました。いつもとは異なる環境で、多くの人と関わりながら過ごした五日間は、新しい発見の連続でした。普段の生活では経験できないであろう、とても刺激的な毎日を送ることができました。

台湾では、学生の語学力の高さに驚きました。英語の発音がとてもきれいで、伝えたいことを英語で臆することなく話している姿を見て、刺激を受けました。一方で、自分は母国語ではないという恐れから、自信を持って英語で話すことができませんでした。しかし、そんな私の英語でも、一生懸命聞いて理解しようとしてくれる現地の学生のあたたかさを感じました。相手の言葉を理解しようという真剣な態度があつて初めて、会話が成り立つのだと思います。現地の学生と話そうちに、相手に自分が言いたいことを正確に伝え、もっと仲良くなりたいと強く思うようになりました。相手とコミュニケーションをとるうえで、その多くを身振り手振りに頼ってする会話でもある程度の所までは意思疎通できます。しかし、やはり相互理解をするうえで欠かすことのできないものは語学力です。改めて語学力の重要性について気づきました。今まで授業を受動的に受けてきた私にとって、自ら積極的に授業に参

加し、学ぼうとする姿勢が顕著にみられる現地の学生の姿には驚きました。それと同時に、これまでの自分の授業態度を見直し、もっと積極的に授業に参加しなければという思いを強くしました。私たち研修学生が実際に参加させていただいた授業では、現地の学生が積極的に話しかけてくれ、協力しながら課題に取り組むことができました。また、実際に行われている授業を見学することができて、とても勉強になりました。ここでも現地の学生のレベルの高さに驚きました。きっと英語を専攻にする生徒用の授業なのだろうと思うくらいレベルの高い授業でしたが、実際は英語を専攻としない一般の学生も受けていたと知り、語学力はもはや専攻に関係なく、必要不可欠な技術であると肌で感じました。レベルの高い授業を目の当たりにして、多くの刺激を学生から受けることができ、とてもうれしかったです。自分の語学力をレベルアップさせようという意欲がわいてきました。

現地の学生に英語を勉強する上でのポイントを聞いてみたところ、「英語で話すことを恐れないこと」「英語に触れ続けること」と答えてくれました。当たり前のことですが、この二つを実行し、継続することは大変なこと。そしてこれら二つの大切さにはなかなか気づくことができません。このことを教えてくれた学生をはじめ、お世話くださった先生方、訪問大学先の先生や学生、台北を案内してくれた学生、共に授業を受けてくれた学生のみさんには感謝の気持ちでいっぱい。素敵な経験をさせていただきありがとうございました。

海外調査研修レポート 東呉大学

言語文化学科 2年 中国語学中国文学コース IA

今回の海外研修が私にとって初めての海外であった。出発前から分からないことがたくさんあった。そして一緒に行くメンバーはどんな人なのだろう、仲良くなれるのかというちょっとした不安があった。そしてなにより一番不安だったのが言葉の壁であった。自分の英語力に自信はなく、ましてや中国語コースであるが会話ができるほど中国語をマスターしているわけではない。「台湾の人たちは親日だから大丈夫」「日本語が通じることも多い」「英語ができなくてもジェスチャーや単語だけでも通じる」など実際に海外へ行ったことがある人たちから聞いていたが、実際に行くまではどんなものか、想像がつかなかった。

実際に台湾に行って過ごした4泊5日というあっという間だった。グループのみんなは学年関係なくふざけ合ったり、助け合ったり笑いの絶えない日々を過ごすことができた。行く前にもっていたメンバーに関する不安はすぐになくなり、とても心強く感じた。

言葉に関する不安は台湾で過ごしていくうちになくなっていった。東呉大学や淡江大学の学生の流暢な英語が聞き取れなかったり、聞き取れても自分の言いたいことがなかなか上手く言えなかったりと、どうしようと思うことも何度もあった。しかし単語を並べたり、簡単な英文を用いたりすることで会話をすることができた。当たり前のように思っていた単語や文が伝わらないことも多々あった。それでも自分の拙い英語に耳を傾けてくれ、話をしてくれる、会話ができるということは大きな喜びであった。もっと話したいという思いがわきあがった。台湾に来る以前の自分では考えられない。会話なんてできるわけない、むしろ怖くて話せなかった。この研修でそんな思いもなくなった。

研修の目的である英語教育の調査のために参加した授業は日本と全く異なるものだった。日本では静かな教室で一人ひとりが黙々と授業を受ける。一方台湾での授業はディスカッションが主に行われており、教室内が静かになることはなく英語が飛び交っていた。あつという間の時間だった。日本の授業よりも楽しいものだった。小中で楽しくやっていた英語の授業の難易度を大学レベルに挙げたように感じた。今回の研修で話すことの楽しさや喜びを感じることができた。他の大

学の授業に参加したり、外国人の友人ができたり、このような感情をすることができたりと、日本にいたら体験できないようなことばかりだった。英語教育についてだけではなく、台湾の人や生活、歴史、文化などさまざまなことに触れることができた。この研修に参加したことは私にとって大きな変化をもたらしてくれた。一步踏み出して新しいことに挑戦する大切さ、いろんな人と会話する楽しさ、英語学習への意欲、価値観など多くのことを知り、多くのことを感じる事ができたこの研修に参加できたことを嬉しく思うと同時に、たくさんの人に参加してもらいたいと思う。

海外調査研修—感想—

言語文化学科 英語学・英米文学コース3年 M.M

この海外調査研修に参加できて本当に良かったと思います。私は将来英語教師を志しており、この研修は台湾の英語教育を視察できると言うことだったので、応募しました。実際に参加してみると、学ぶものが多く、有意義な時間が過ごせました。

調査をしていて驚いたことは、英語学科の学生とそうでない学生との TOEIC に対する意識の差です。東呉大学の英語学科の学生は TOEIC を 800 点取らないと卒業できないのに対し、それ以外の学生は、TOEIC を受けなくても良いそうで、英語学科以外の学生は TOEIC を受けたことがない人が多かったです。台湾は日本より TOEIC の点数が高いということを聞いていましたが、日本のように全学部の学生が受ける必要がないので、相対的に点数が高くなるのではないかと考えました。

授業は、三つ參觀しました。一つ目は、40 人位の台湾の学生と日本人学生で 4,5 人のグループになり、一緒に英字新聞を用いたワークをしました。「今まで英字新聞を読んだことがある人？」という問いかけから導入が始まり、「なぜ英字新聞を用いたワークをするのか」という授業の目的や、ワークの方法を細かく学生に説明して、学生全員が授業内容に興味を持って望めるような工夫がなされていました。学生が英語を話したくなるような雰囲気作りがなされていて、全体的にコミュニケーションな授業でした。英語で会話をするような授業がほとんどない山口大学と比べて、英語での学生と先生とのやりとりが多かったので驚きました。この授業を受けた感想としては、この授業だったら英語を話そうと思えるし、何より楽しく学べると感じました。

二つ目は、台湾の学生と日本人学生で小グループになり、まずお互いに自己紹介をし、代表一人がみんなの前で日本人学生の紹介をしました。次に、おすすめの場所や物などを台湾学生に質問し、ワークシートを埋めるワークをして、最後に台湾学生がプレゼンをするという授業でした。この授業も基本的に英語で授業がされていて、会話が多かったです。この授業で印象に残っているのは、プレゼンを行う前に、評価方法や気をつけるべきポイントを説明し、学生の意識を上げていた点です。同じプレゼンをするのでも直前にポイントを確認することで、発表レベルが変わるように感じました。このプレゼンを学生に評価させていたのも印象的でした。

三つ目は、通訳の授業で基本的に先生が前にいて、指示を出していました。前の二つと違い人数が多く、挙手制でした。黒板に授業の流れを書いていたのと、挙手し発表した学生に対して、その都度拍手をしていた点が印象的でした。

調査研修を通して感じたのは、台湾学生の積極性の高さです。どんな問いかけに対しても反応していましたし、英語を話そうという姿勢等、見習うべきものがありました。これらを引き出す先生の工夫も素晴らしいかったです。今回の研修で学んだことは、学生の間でも、教師になっても生かしていこうと思います。

海外調査研修（東呉大学）感想

人文社会科学 社会学コース3年 Y.T

今回の海外研修は、私にとって初めての海外行きでした。日本しか知らなかった私は、耳慣れない言葉にかまれ戸惑うだけではなく、見慣れない風景、右車線で走る自動車、初めて食べる料理、すべてに刺激を受けました。5 日間で、東呉大学、淡江大学の英語の授業を受け、学生と交流し、また台北や淡水などの観光もできました。

私は、これまで一度も英語できちんとした会話をしたことはありません。ですが、日本ではそれなりに英語の勉強もしていたのでなんとかなるだろう、と思っていました。しかし、実際に英語の授業に参加し学生と英語で会話すると、相手が言っていることは分かるけれど、自分の気持ち、伝えたいことがとっさに英語で表現できず、あまり会話になりませんでした。台湾の学生が一生懸命こちらの伝えたいことを読み取ってくれようとしてくれたので、とても楽しい時間にはなりました。けれど、自分の英語力というよりも、英語がわかることと、英語で会話することの違いを実感しました。英語がわかっても、相手と会話するには言葉だけではなく、ことばを発するタイミング、みぶり、表情、などが大事であることがわかりました。

日本では、相手と言葉が通じるのが当たり前であるため、私が体験したように相手とコミュニケーションをとるのが困難である状況にであうことはほぼありません。しかし、日本語で会話しても相手ときちんとコミュニケーションをとるためには、どのタイミングでどんな言葉をだすのか、どこであいづちをうつのかといった、言葉以外のフィールドが非常に重要になってきます。

このように、日本ではあたりまえになっていた、相手と会話することの難しさを台湾に行ったことであらためて考えさせられました。今回の研修で、自分にはまだ知らない、できないことが数多くあることを実感しました。日本に帰ってきてから、英語の勉強はもちろん、人と話すときに、表情や、口調が相手に不快な思いを与えていないか、きちんと自分の思いが伝わるように話せているのか意識するようになりました。海外研修では数多くの体験をさせていただいて、本当に良かったと思っています。

海外調査研修全体の感想

言語文化学科中国語・中国文学コース2年 M.M

私にとって初めての海外だったので、出発する前はほとんどの人に日本語の通じない場所に行くことがとても不安でした。しかし実際に台湾に行ってみると、中国語が話せなくても英語で話して買い物ができたり、駅のホームなどに書いてある注意書きも中国語と英語が併記されていたりして、英語が少しできればそれほど困ることはありませんでした。

大学の授業も見学しましたが、先生は教室の中を歩き回って学生によく話しかけ、学生は先生の質問にとても積極的に手を挙げて、発言しようという意欲をとっても感じる授業だったのが印象的でした。グループワークの時には私にも学生がよく英語で話しかけてくれて、楽しくグループワークを進めることができました。

私たちを淡水に案内してくれたボランティアの学生をはじめ、台湾の学生の中には英語を専攻しているわけではないにも関わらず TOEIC で 800 点をとったという人もいました。そして、そんな高得点をとっていても英語を勉強するのは学校の授業のみで、家では英語の勉強をしないという人が多くいました。ところが、勉強以外で英語に触れる機会があるかとたずねると、主に「インターネット、音楽」などの答えが返ってきて、インターネットでも日本語以外の言語で書かれたページが出てくると敬遠してしまう私との差を感じました。

TOEIC で高得点をとるには家で「勉強」して当たり前の一般的な日本の学生と台湾の学生では英語にふれる頻度が違ったのです。台湾のいろいろな場所で英語で大体コミュニケーションがとれたのも、台北の人が外国人に慣れているからだけでなく、台湾の人が日本人よりも比べものにならないほど英語に接する機会が多いから、つまり英語に慣れているからだろうと思います。

最後に、私が台湾で何度も思ったのは、「もっと語学を勉強したい」ということです。特に会話が全くできず、学生に中国語で話しかけられても意味を理解できないので英語で言い直してもらおうということが何回もありました。

1年間中国語を勉強していましたが、専攻を聞かれた時に「中国語を専攻しています」と自分で言うのが恥ずかしくなるほど、台湾にいた間に中国語で話すことはほとんど無く、ほぼ英語を使って話しました。自分の専攻をもっと胸を張って言えるように、これからは読み書きだけでなく、話す・聞く力も含む総合的な語学力を身に着けたいと感じました。

今度からは、インターネットで中国語で書かれたページを見つけてもすぐに引き返さず、自分なりに内容を理解しようとしてみたいと思います。

台湾東呉大学での研修プログラムを体験して

人文社会学科 社会学コース2年 HM

台湾の大学での英語学習はいかに成功したかという疑問をテーマとして持ち研修に臨んだ。実際に授業を受けてみて大きな差だと感じたのが受講している生徒の積極性の違いであった。山口大学の授業では講義という形式の授業では、教授の話聞くのみである。しかしそれに対して、それぞれ2つの大学の講義という形式の授業であっても生徒の発言が重要視されていたように感じた。

特に淡江大学で受けた英語の講義がまさに日本との大きな差のあるものであった。その授業は淡江大学の人気な講義のうちのひとつらしい。先生には厳しい一面もあり、決して簡単な授業といった感じではなかったが生徒のコミュニケーションがうまく取れていた。先生は黒板をほとんど使わず、テキストと生徒との会話を中心に授業を展開していた。発言をもとめると全体の2割程度の生徒が手を挙げ、その回答が正解していれば生徒が皆で拍手するという形式であった。何度も手を挙げ、回答しようという姿勢を持つ生徒もおもい全体を見回すと退屈そうな生徒はほとんどおらず、生徒がいきいきとしている印象を持った。日本との差として感じたのはこのような点である。

東呉大学のボランティアの学生の英語能力の高さに最も驚いた。日本では英語科で英会話ができるのはほとんどが海外に留学に行ったり、授業の他に英会話学校に通ったりしている生徒だがボランティアの数名の生徒たちのなかには海外に行ったことがない、また現在は学校の授業のほかには特別に学習しているというわけではないという学生がいた。英語能力の高さの要因よなっているものは何なのかもっと学生の生活に密着し、どのような授業、カリキュラムなのか詳しく知ることができたらと思う。

台湾と日本の英語学習の差はどこにあるのか、学習開始年齢、学校での授業の充実度、あるいは英語に触れる機会の差や教養としての英語の価値、重要性が日本よりも高いなどの、いわゆる文化的なものも背景として考察することができる。英語学習を調査するという点に関しては、まだまだ自身の事前調査の努力不足、また取り組みの甘さを感じた。

この研修での一番大きく、心に残った成果は台湾の学生と交流できたことである。個人旅行では決してできない海外の大学の授業を現地

の学生とコミュニケーションをとりながら受けるということ、そしてその生徒との交流関係を築くということができたということが、私にとってものすごく大きな収穫であった。英語が得意でない学生同士でも相手に理解してもらおうと言葉を変えてみたり、絵をかいてみたりという努力は日本の学生同士ではない交流、コミュニケーションの方法で、難しかったが楽しさを感じた。今回の研修で出会った台湾の友人たちとの繋がりを大切に、先生方のように大きな規模での交流のきっかけにすることができればと思う。

台湾海外調査研修の感想 2013年実施

言語文化学科2年 AS

私が今回、台湾研修で感じたことは、主に2つある。1つ目は台湾の人々の英語の語学力の高さに自分の英語力不足を改めて痛感したことで英語に対する思いが以前よりも増したこと、2つ目は、台湾の人々の温かい性格が大好きだということだ。

東呉大学で英語の授業を二つ受けたが、ヘッドセットを用いた授業方法が面白かった。私が今まで受けてきた英語の授業は、ヘッドセットを使ったことがなく、イヤホンを用いた授業を一回受けたことがあるだけだった。そのため、東呉大学の授業でヘッドセットを用いるということの思いついたことがなかった。その際、そのヘッドセットを用いた会話の授業では、英語の話す速さについていけず、何度も相手に、ゆっくり話してほしい、と言ってばかりだった。しかし、その結果、今の私では、相手と意思疎通ができるほどの英語の力はついていないことを痛感することができた。さらに、私は中国文学・中国語学コースを所属しているため、英語より中国語に対する思いのほうが高かった。今でも中国語に対する思いの高さは変わらないが、英語に対する興味も以前より大きくなった。私は今まで英語に対して「勉強する」といった義務のような思いを感じていたが、今回の台湾研修へ参加したことで、英語で会話ができる台湾の人々を見て、私自身も彼らのように「話したい」という自主的な思いが大きくなった。私は現在、英語を専門とするコースに進んでおらず、英語よりは中国語を学びたい気持ち強いことに変化はないが、今ではその気持ちに加えて英語も学びたい気持ち加わった。

また、私は東呉大学の生徒になぜそんなに英語が上手なのか尋ねると、小学生のころから、あるいはそれよりも幼い時から英語の勉強をしていた、と答えが返ってきた。私は英語の勉強は中学生になってからであったため、それを伝えると、英語の勉強の開始時期の違いにお互いが驚いた。私は台湾の人々は英語の語学力が高い、と聞いていたが、幼いころから母語に加えて英語も一緒に勉強していると、中学生から英語の勉強を始める私のような人よりも高い語学力をつけていることに納得できた。

2つ目の台湾の人々の温かさについては、これも英語を通じて感じたことである。英語の語学力が低い私にとっては、英語の授業で行われたリスニングや会話もついていくことが精一杯だった。さらに、会話では長い文章で話すことができず、話す速度も相手にゆっくり話してもらわないと聞き取ることができなかった。私はそのような状態に気落ちしものの、台湾の人々は温かい対応をしてくれたため、私は英語で話すことをやめることはなかった。私が台湾にいた間、英語に興味を持ったことは、彼らの温かい人格にもあった。

以上が私が主に台湾研修で感じたことである。私はもっと日本で英語や中国語の力をつけて、再び台湾へ行きたいと思うことができる4日間であった。

台湾海外調査研修の感想

言語文化学科 2年 K.M

今回の台湾への語学研修では、自分にとってとても価値のある非常に貴重な体験ができました。私は今回の台湾への渡航が初めての海外への渡航であり、桃園空港に足を踏み入れた瞬間から見るもの聞くものすべてが新鮮で、刺激的でした。

特に印象に残っているのは物価の低さでした。電車賃や自動販売機の価格は日本の半分ぐらいの水準でした。また、1日目に行った松山駅周辺の市場での価格は非常に低かったです。その中でも衣類の価格は想像を絶する低さでした。自分の感覚では日本の3分の1かそれ以下でした。とてもうらやましいと最初は感じましたが、案内して頂いた方は「台湾の物価は収入から考えるとちょうど良いと思うが、最近では高いと感じることが多い。」という風におっしゃっていました。その言葉に初めは驚きましたが、市場を歩いていて、たまたま目に入った衣類を販売しているお店の求人掲示では、月給2万円～3万円、休みが6日と書いてありました。それを見て自分は納得しました。それと同時に、台湾の労働条件は厳しいものだと感じました。

また、台湾にはおいしいものがたくさんあったことも印象に残っています。パイナップルやバナナ、フルーツのたくさん乗ったかき氷、小籠包、胡椒餅などはどれも自分の舌に合っていて2つ目が欲しくなるほどでした。そんなおいしいものの中でも、私はチーパイが一番好きでした。2日目に士林夜市で食べたのですが、あの大きさと独特の味は食いしん坊の私にはびつたりでした。

さらに東呉大学での授業や設備も印象的でした。実際に授業に参加し、東呉大学の英語学科の学生と英語で会話することになったのですが、流暢に英語をたくさん話す東呉大学の学生に反して、私は全く自分の考えを英語にすることができませんでした。しかも、話せないなりに絞出したわずかな英語も、相手には通じないことがありました。恐らく発音が悪すぎたのだと思います。多少英語には自信を持っていたのですが、そんな自身は一瞬で打ち砕かれ、とても自分が情けなくなりました。これまでの英語の学習の仕方ではだめだということを痛切に感じました。

最後に、今回の語学研修を終えて、私は海外に行きたい、住みたいという感情がより一層増しました。次に海外に行った時は、現地の学生よりも早く英語を話してやろうと思います。そのためには普通の生活で何をしたら良いかを常に考えながら英語を学習していきたいと思っています。

台湾海外調査研修の感想

言語文化学科 3年 K.R

私は昨年、台湾の開南大学へ今回と同じように約一週間研修に行ったが、今回の研修でも、前回に加えまた面白い体験ができ、外国語に対する必要性の意識が高まった。

今回、東呉大学では2つの授業を受けさせていただいた。まず驚いたのは外国語学習の器具の数々。外国語学習室の各テーブルにはヘッドホンのようなものが設置されていて、各生徒がヘッドホンマイクに向かって話し、それを自分で聞き直したり先生が確認したりといったことができる。それだけではなく、その機会を通して、違う席にいる人と話すこともできるし、話し相手をランダムに決めることも可能だ。受講した片方の授業はIELTSの授業であった。IELTSは留学などに必要な試験で、TOEICとは違い試験内容にスピーキングが入ってくる。そんなスピーキングの授業では、このヘッドホンを徹底して使った。また、この授業の最後は全員IELTSを受けるという。やはり、試験(例えばTOEIC)に向けての授業でも、その授業の最後にその試験が受

けられるということは学生の士気を高める方法として素晴らしいと思う。もう一つの授業は英語でプレゼンテーションするといったものだ。内容的にも、生徒の態度も日本とはあまり変わらなかった。また、外国語に力を入れるための部屋が提供されているのはまた驚かされた。パソコンや教材も充分すぎるほど揃っていて、アシスタントの学生もいて実際に会話練習をすることができる。一週間におよそ100人以上の生徒が利用するらしい。こういった施設を見ると、外国語の必要意識が感じられ、山口大学でもぜひ導入できないかと思う。

次に学生について。学生はとても積極的だった。去年も思ったが、やはり台湾の学生は発音がきれいだ。英語学習をいつから始めたかという質問に、多くの学生6歳ぐらいから英語の教室に通っていたという話を聞き、去年の開南大学の学生も早期学習をしていたということ思い出した。また、東呉大学の学生に聞いたところ、東呉大学ではTOEIC650点が卒業要件となっているらしい。英語学専攻の私のコースですら500なのにと若干引け目を感じてしまったが、よく考えると山口大学の卒業要件はもっと高くてもいいのではないかと思う。近い将来、国際関係の学科が作られ、グローバル化に力を入れると耳にしている。そこまで考えるならいっそ全学科の卒業要件を50点引き上げるのもいいのではないかと思う。そして、なんといつてもみんな英語(外国語)を使うことに抵抗がない。文法がどれだけ間違っても相手が情報を伝えようといった気持ちがとても感じられ、英語でのコミュニケーションにたじたじであった私とても助かった。

この研修でお世話になった東呉大学の学生、先生方には深く謝意を述べたい。もし台湾へ行くことがあればまた東呉大学にお邪魔したいと思う。こういった海外の大学の授業を受けると、やはり外国語の必要意識が深くなる。今回の研修の熱が冷めないうちに、自分の勉学の糧にし、多くの人に伝えていきたいと思う。

台湾海外調査研修の感想

人文社会学科歴史コース 3年 U.M

山口大学人文学部の学生7名(引率の教員2名)は2014年3月24日から3月27日まで台湾で研修を行った。1日目は福岡空港から飛行機に乗り、台湾の桃園国際空港へ到着後、ホテルまでバスを使った。ホテルでは東呉大学の職員にチェックインを手伝っていただいた。その後、前回の台湾での研修時に知り合った開南大学の学生と劍潭駅で待ち合わせをして、饒河街観光夜市に行った。夜市からの帰路では、台北駅で開南大学の学生と別れ、日本の学生だけでホテルまで帰った。劍潭駅の近くには台北一の夜市である士林市場があるため、少しだけ士林市場へも立ち寄った。

2日目は、朝、ホテルに東呉大学の英語学科の学生が迎えに来てくれ、東呉大学まで一緒に登校した。彼らの英語は堪能だが、日本人にも聞き取りやすいもので、私たち学生は積極的に会話を試みた。そこから、東呉大学内にある言語を勉強する施設を見学した。ヘッドフォンを使って遠くの席の人とランダムに会話できるシステムがあったり、いつでも自由に英語・日本語・ドイツ語を学ぶことのできる部屋があったりした。その後、東呉大学の英語の授業を2つ受講した。1つ目は、会話を中心とした授業で、TOEICなどの英語能力試験の対策も兼ねているようだった。ヘッドフォンを使って隣の席の学生と会話をしたのち、ランダムに選ばれたほかの席の人とも会話練習をした。また、インターネット上で読むことのできる英語のニュース記事を使って授業が進行され、英語に親しみを持てる工夫がなされていた。2日目の授業は会話というよりもリスニング重視の授業だった。冒頭では有志の学生による英語でのプレゼンテーションが行われた。その後は英語の教科書を使い、単語を確認したり、リスニングを行ったりした。ど

ちらの授業もすべて英語で行われ、学生たちは積極的に英語で発言をしていた。授業内で教員が学生に「中国語風英語」を使わないように指導していたのがとても興味深かった。授業後は英語学科の学生と台北 101 へ行き、洋書を取り扱う珍しい書店や土産物の店をめぐり、タワーを外から眺めた。タワーに上ろうとしたが観光客が多すぎたのであきらめた。そして士林市場を少し離れたところにある店で小籠包を食べ、士林市場で買い物と食べ歩きをした。タピオカミルクティーや鶏排などの名物を食べ、日本の学生はとても満足した。東吾大学の学生に何かほしいものがあるかと聞かれたため、私は靴とバックパックがほしいと答えた。すると彼らは知っている限り安くて品ぞろえの多い店をたくさん紹介してくれ、私は無事バックパックを安く手に入れることに成功した。値切りにも挑戦し、とても良い経験となった。

3 日目は東吾大学図書館と留学生寮、中国語を学ぶ施設を見学した。東吾大学図書館は OPAC 設備も充実し、ラーニングcommons など最近注目される図書館施設も導入されていた。留学生寮は中国語を学びやすい環境が整っており、学生アドバイザーも充実しているように感じた。施設の見学後は、人文社会学院の先生の接待を受けた。日本語学科の学生 3 人を交え昼食をとり、その後自転車で台北を巡った。共産党時代に政治犯が処刑された場所や、客家の文化を紹介する施設の見学もした。自転車ツアーの後、台湾大学周辺で有名なミルクティーを飲み、台湾大学の内部を散策した。そして、全員一緒にレストランで夕食をとり、解散した。その後日本の学生と速水先生は、台北で有名なかき氷を食べに行った。自分たちで MTR を使い、地図を見て外国を歩くのはとても刺激的な経験となった。

4 日目は朝から一部の日本の学生だけで中正紀念堂へ足を運んだ。台湾の象徴的な場所で、朝早く行ったため衛兵交代もみることができ、素晴らしい体験ができた。その後いったんホテルに戻り、バスで桃園国際空港へ向かった。空港では 1 日目に私たちを饒河街観光夜市へ案内してくれた開南大学の学生が見送りに来てくれていたため、一緒に昼食をとった。

私は今回が 2 回目の台湾での研修だったが、改めて台湾の学生の英語能力の高さに驚かされた。彼らは 3 ~ 4 歳から英語に触れていることが多いため、日本の学生よりもスムーズに英語を操る。また、台湾の大学の英語の授業はすべて英語で行われることがほとんどで、教員のレベルも高いと考えられる。さらに新聞を使ったり、ヘッドフォンでランダムに学生と会話したりと、授業内容がユニークなものも大きな特徴である。中でも、英語でプレゼンテーションをすることは学生にとってとても良い学習方法であると考えられる。日本の英語の授業は受動的なことが多いが、台湾の英語の授業は能動的なものがほとんどである。学生たちは英語専攻でなくとも、ある程度すらすらと英語を話すことができる。英語を話すことに慣れていない様子も感じられた。

今回研修に参加した私たち山口大学の学生で、山口大学内に、英語のプレゼンテーションを中心とした新しい英語学習が気軽にできる場所を作ることを考えている。東吾大学の言語センターのように言語学習に特化した書籍を買い揃えたり、英語でプレゼンテーションをしようとしたり、いつでも TOIEC などの勉強ができた場所を作りたい。今回台湾で学んできたことを山口大学にすこしでも還元していきたいと考えている。

最後に、学生たちによる台湾の国会占拠という歴史的な運動が行われている中、その国へ行って学生たちとかわりあえたことがとても刺激になったと思う。彼らのエネルギーを感じて、私が日本の学生としてどのような意識でいるべきなのか考えるきっかけとなった。エネルギーな台湾人たちは私たち日本人に対しても優しく、親切だった。それは大学の人々だけでなく、コンビニやファーストフード店の店員、

夜市の屋台の人、警備員に至るまでたくさんの台湾人に言えることだ。台湾という場所の素晴らしさを改めて感じることでとても素晴らしい研修だった。これからもこの研修が続いていくように尽力したい。

台湾海外調査研修の感想

言語文化学科英語学・英米文学コース 3 年 N.C

今回の研修では東呉大学に訪問させていただいた。東呉大学では、まず Language Center を見学した。その中で特に印象的であった施設は、語学を勉強したい学生のための自主活動ルームのようなところである。そこでは、パソコンとさまざまな言語の多様な資料（外国語の辞書、小説、ドラマや映画の DVD など）が自由に使用できるようになっており、毎日多くの学生が利用しているようだ。今回は日本のアニメを学生が日本語で吹き替え録音したものを聞かせていただいた。また、その活動を手助けしているのも学生であり、アルバイトとして働いて運営を行っていると聞いた。

次にふたつの英語の授業に参加させていただいた。今回参加した授業が行われていた教室には、すべての机にヘッドホンとマイクの付いたヘッドセットが備え付けられていた。先生用のヘッドセットもあり、先生が話すときや授業で CD の音源を聞くときなどに、それを用いてひとりひとりが自分のヘッドセットから音を聞いていた。このおかげで座った席の位置に関わらず、どの学生にも平等に音が聞こえるようになっていて非常に良い装置だと感じた。またマイクを通して録音することも可能で、それぞれが自分の話す英語を喋って、録音されたものをまた自分のヘッドホンから聞くことが出来た。学生全員が同時にそれを行うことが出来るためとても効率的であり、日本ではこのように客観的に自分の発音を聞く機会はめったにないので新鮮であった。

授業以外には、二日目の夜に英語学科の学生に台北市を案内してもらった。夜遅くまでわたしたちを楽しませるため一生懸命になってくれ、とても温かい気持ちで過ごした。互いに英語で会話をしていたが、やはり東呉大学の学生のほうが英語を流暢に話せていた。三日目は日本語学科の学生と自転車やバスで台北市をまわった。日本語学科の学生は日本や日本語をとても好きでいてくれており、嬉しい気持ちで胸がいっぱいになった。日本に帰った今でも連絡を取り続けており、本当に良い出会いをしたと思っている。また面白かったのは、東呉大学の先生が中国語で話したものを日本語学科の学生が日本語に訳してくれ、表現が難しい場合には英語に訳してくれたものを、わたしが日本語に訳すということをしたことだ。このとき、外国語を知っているだけでなく使えるということはコミュニケーションにおいて本当に役に立つことだと感じた。

台湾と日本の学生の英語能力の違いで最も大きなものは、スピーキングであると改めて感じた。英語を学び始める時期が日本では中学校一年生からなのに対し、台湾では小学校一年生からということもその違いに関係しているのかもしれないが、今回の研修でわかったことは勉強方法が大きく違うということだ。台湾ではスピーキングが重視されており、先生は学生ひとりひとりの発音をチェックする。授業でも発音する機会が多いと感じた。日本では人前で英語を話すのは恥ずかしいというような風潮があるが台湾ではそのようなものは感じられず、みな堂々と話していた。また日本語学科の学生もとても意欲的で明確な目標に向かって努力し続けており、今回出会ったすべての学生がわたしにとって大きな刺激となった。研修に参加する前に思っていた以上に大きなものが得られ、本当に参加して良かったと感じている。海外の人と話す際に不自由なくらいまで英語を使えるようにしたいという新たな目標も出来た。今回の経験を生かしてこれからも努力していきたい。

台湾海外調査研修の感想

人文社会学科 3年 IY

今回私にとって初めて海外に出る機会となった交流活動（語学力調査）だが、全体としての感想は、はじめての海外が台湾で尚且つ旅行等ではなく少なからず交流活動が伴っているもので本当に良かったと思えるものだった。私個人としては、語学については、中国語はおろか英語に関しても満足に使えないもので、出立直前まで、「本当に自分なんか海外に出て満足な成果を得て帰ってこられるのか」と考えるほどだったことを覚えている。台湾本土についてからもその不安自体は物珍しいものを見ていると多少薄れはしたものの、その時の段階ではまだ自分の中で「この数日間どうやっていこう」というような気持ちではいた。正直初日の案内をしてくれた台湾のスタッフには申し訳ないものがあった。

だが日が経つにつれ、海外だろうが日本だろうが「自分を伝える」ことに必要なのは、コミュニケーションだということがわかってきた。能力としなかったのは、英語の力が必ずしも要求されないこともあるからだ。たとえば、私などはジェスチャーや指し示すなどでもこちらの意図を伝えることができた。英語の力は確かに必要なものだし、今回の研修にあたって、英語がしゃべれないことでの不都合のほうが大きかったのは事実ではあるものの、言語の本質が「伝えること」にあるとするなら、しゃべれなくても自分の考えを言葉だけに限らず一生懸命に表現していくことが重要だと思えた。同時に日本の英語教育の弱点も自分なりの視点から考えさせられるものを見いだせた。日本は文法通りに完璧にしゃべったり書いたりを重点に置いたものだが、そのおかげで積極的にしゃべっていかうとする意志を阻害しているのではと考えられた。実際私が冒頭の不安を持った理由も、「意図を伝えるためにきっちりしゃべることができるのか」という不安からだったからだ。日本社会においてTOEIC 高得点者が外国人と英語でのコミュニケーションをとれないといわれているのもこのことが関係するのではと考える。

私個人の目的であった文化的思想的事象の考察については、時期が時期だけに研修中も考えさせられるものが多かった。ニュースでは連日報道され、街中の目立たないところではあるが、現トップを皮肉ったものも見られた。台湾は地理的文化的に中国・欧米の影響を強く受けた国の一つと考えられるが、台湾は現在もその文化的思想的なものが対立項として拮抗状態にある土地なのだ実感させられた。少なくともそういったものが若者、特に大学生などの知識人、を中心にあるのは今の日本とは真逆の性質だと思えた。何が言いたいのかというと、若者が台湾全土を巻き込むほどの大きな運動を学生たちが中心に展開しているのは、彼らの土地を想う気持ち（？）が大きく反映されているのだと言わざるを得ない。学生や若者は将来その国や地域を支える大きな原動力なだけあって、個人的にはその土地の将来は彼ら若者が決めるものだと考えさせられた。

台湾海外調査研修の感想

言語文化学科 3年 SA

台湾を訪れたのは、今回が私にとって初めてでした。私は台湾を訪れる前、現地の方と上手くコミュニケーションはとれるだろうか不安でした。しかしながら、台湾に着くと温かく迎えてくださる先生や学生に囲まれて不安が一気に飛び去りました。

私が、まず東呉大学を訪問して驚いたことは、日本人よりも圧倒的に英語を話すことに慣れているということです。なぜ、そんなに話すことが上手なのかと質問したところ、多くの学生が小学生のころから勉強していると教えてくださいました。しかし、もし私たち日本人が小学校の時から英語の勉強をしたとしても彼らのようにうまく話すことができ

るでしょうか。私は一概にそう言えないと思います。私の周りには、幼いころから英会話教室に通っていたひともいますが、英語を習得し話せるようになったというようには見えませんでした。台湾の学生と日本の学生の違いは失敗を恐れるか恐れないか、だと感じました。それを強く感じた場面があります。英語の授業の時、日本人学生が教室の前に並んで自己紹介をするというような機会がありました。そこで少し言葉を間違えた日本人学生がいました。その学生は、「すみません。」と言いました。すると東呉大学の教授が、「すみませんと言ってはいけません。ミスは気にしてはいけません。」とおっしゃりました。そのとき私は日本と台湾の違いをものすごく感じました。

次に驚いたのが、教室に装備してあるイヤホンです。これがただのイヤホンでなく、他人と会話することができる仕組みになっていました。また自分の話した英語を録音することもでき、自分自身で確認できたり教授にその発音などをチェックしてもらうということもできました。山口大学にはこのようなものはなかったので、とても魅力的でした。他にも、台湾の日本語を学んでいる学生も、上手に日本語を話していました。私は大学で中国語を学びたいと思っているので、同じ語学を学ぶものとして、すごく刺激的でした。

私はまだまだ話せるレベルに達していなかったため、台湾の学生に日本語を話してもらっていました。すごく助かったのですが、少し中国語を話せないことに悔しい気持ちがありました。今度台湾へ訪れるときまでには、もっと英語も中国語も話せるようになっておきたいと思いました。

日本に帰った今、台湾でできた友達からたくさん連絡が届いたり、SNSなどで、会話したりなどできて、とても幸せです。これからもずっと連絡を取っていきたく、東呉大学と山口大学の交流もずっと続いてほしいです。今回、さまざまな計画を立ててくださった先生方、サポートくださった先輩方、仲良くしてください、いつも気を配ってくださった台湾の方々には本当に感謝しています。成長した姿で、また皆さんに会いたいです。本当にありがとうございます。

